妊娠中に母親が看護職者から受けた乳房・乳頭の観察と 母乳育児への効果 —3 か月児健診での調査から—

北原 愛子¹ 若松美貴代² 手島 美聡³ 中尾 優子²

Actual condition and effect of observation of the breast and nipple for
breastfeeding during pregnancy

—The investigation of the 3-month infant health checkup—

Aiko KITAHARA¹, Mikiyo WAKAMATSU², Misato TESHIMA³ and Yuko NAKAO²

Purpose

The purpose of this study was to determine the actual breast and nipple observations received by pregnant mothers from nurses and midwives and the effects of breastfeeding.

Methods

The study method consisted of an anonymous self-administered questionnaire survey of 302 mothers who attended infant health screening with their infants. This study was approved by the ethics committee of the Kagoshima University (No.348).

Results

Valid responses were received from 240 mothers (79.5%). Mothers who underwent observation of the breast and nipple for the entire duration of their pregnancy accounted for 129 of the 199 respondents (64.8%). Most mothers felt that observation of the breasts and nipples was necessary, with 185 of the 199 respondents (92.9%) indicating a perceived need for this type of observation. Mothers who underwent observation of the breast and nipple for the entire duration of their pregnancy revealed a significantly related to breastfeeding among the mothers ($p < 0.05$).

Conclusions

Many pregnant women wish for observation opportunities, the observation of the breast and nipple during pregnancy by midwife or nurse had breastfeeding rate than those who did not observe.

¹ 元鹿児島大学大学院保健学研究科修士課程

¹ *Former Kagoshima University Graduate School of Health Sciences Master Course*

² 鹿児島大学医学部保健学科

² *Department of Reproductive Health Care Nursing, Kagoshima University Faculty of Medicine school of Health Sciences*

³ 元長崎大学大学院医歯薬学総合研究科修士課程

³ *Former Nagasaki University Graduate School of Biomedical Sciences Master Course*

Key words : rate of breastfeeding, pregnancy, observation of the breast and nipple

母乳栄養率, 妊娠期, 乳房・乳頭観察

I. 緒言

日本においては妊娠期から乳頭の手入れや乳管開通法マッサージが必要と考えられ、乳房や乳頭ケアが行われてきた¹⁻⁵⁾。一方、WHO は妊娠期の乳頭マッサージの必要性を述べておらず⁶⁾、諸外国においては積極的な乳房・乳頭のケアは行われていない⁷⁻⁸⁾。その後、乳管開通や乳頭の鍛錬やマッサージ、軟膏などの塗布は有害であること⁹⁾や、乳頭の大きさ、形が母乳育児でできるかどうかに影響を与えないこと¹⁰⁾が紹介された。海外の影響をうけて日本でも乳房・乳頭のケアの研究が行われ、一部 Baby Friendly Hospital における妊娠中の乳房・乳頭のケアは必要とする¹¹⁾研究結果もあるものの、「乳頭マッサージの有無による母乳育児率に差が見られない¹²⁾」や「妊娠中の乳頭マッサージについては実施しない場合が母乳育児率は高い」と報告がされた¹³⁾。乳房や乳頭マッサージの指導の割合は、村井らの調査で 84.0%¹⁴⁾、芳賀らの調査の母乳栄養の母親で 60.9%¹⁵⁾、井上らの調査で 62.5%¹⁶⁾と報告があるように、研究方法や対象の違いなどから一概に比較できないが、妊娠期からの乳房・乳頭のケアが減少してきた経緯を見ると、妊娠中の乳房・乳頭のケアは必要ないとの考えが広まってきたことの現れであると考えられる。

母乳育児を支援するためには出産前から母乳育児の利点とその方法に関する情報を提供することが重要といわれている¹⁷⁾。しかし平成 27 年の厚生労働省の妊娠中における母乳に関する指導状況の調査¹⁸⁾では、指導を「受けなかった」29.0%と「受ける機会がなかった」11.1%をあわせると 40.1%となり、10 年前の調査より指導を受けていない妊婦が漸増の傾向である。母乳育児に関する指導を受けていない理由としての 2 つのことが考えられる。その一つは妊娠中の乳房・乳頭のケアは必要ないとの考えから乳房・乳頭の観察も減少していることが考えられる。妊娠期から乳頭の手入れや

乳管開通法のマッサージが必要と考えられていた¹⁻⁵⁾時代は実際に乳房・乳頭の観察をしながら手入れやマッサージ方法について指導をする機会になっていた。しかし、UNICEF/WHO⁹⁾が乳房や乳頭が母乳育児に向いているかの判断のための観察は有害としていることから、臨床現場においても乳房・乳頭の観察が減少し間接的に指導も減少していることが予測される。もう一つの理由は母乳育児に関する指導は、指導されても認識がされにくいことが考えられる。各医療機関での妊娠期の保健指導については母親学級などの集団指導や妊婦健診の際の個別指導などである。その中でも実際に看護者から観察され、指導されることは非常に印象に残ることである。手入れやマッサージが必要と考えられていた頃は妊娠期の乳房・乳頭の観察をされることであらためて自分の乳房について認識し、まだお腹にいるわが子への栄養法をじっくり考える出来事になり、母乳育児を強く意識する機会になっていたのではないかと。我々は乳房・乳頭の観察に着目し、母親が乳房への意識を向けられるように乳房・乳頭に触れることなく観察されたことを認識することが重要ではないかと考えた。UNICEF/WHO⁹⁾は、妊娠中の観察で乳房の発達を指摘し母乳育児への準備をしていることを伝えることは有用であると述べている。先行研究では手入れやマッサージに関する調査はあるが、観察に関しての調査は極わずかである¹⁴⁾。

そこで、これらのことを踏まえて本研究では妊娠中の観察に焦点をあて、母親が受けた乳房・乳頭の観察の実態と母乳育児支援への効果について明らかにすることとした。

II. 研究方法 (対象・研究手順・倫理的配慮)

1. 用語の定義

本研究での乳房・乳頭の観察とは「乳房・乳頭に触れることなく見る」とし、乳房・乳頭のケアとは乳管開通や乳頭の鍛錬やマッサージ、ク

リームや軟膏などの塗布のことを指し、「実際に直接的に乳房・乳頭に触れ、何らかの処置をおこなうこと」、乳房・乳頭の実際のケアとは、乳房・乳頭の観察、乳房・乳頭のケアこれらを含めたケアとした。さらに乳房・乳頭のアドバイスとは「乳房・乳頭を観察し、乳房・乳頭に手を触れず助言をおこなうこと」とした。

2. 研究対象および調査期間

研究対象は A 県内の保健センター 3 か所の生後 3 か月児健診に来所する母親とし、児の月齢が 5 か月以上、36 週未満で出産の母親を除外対象とした。調査期間は 2016 年 3 月 25 日～5 月 27 日であった。

3. 調査方法

研究デザインは自記式質問紙票を用いた横断研究である。研究協力施設である保健センターから対象者へ直接配布または郵送で調査依頼文と質問紙票を配布した。郵送の場合は対象者に乳児健康診査時に質問紙票の持参を依頼した。郵送、直接配布の両者とも各自で会場内の回収箱に投函を依頼し、健診終了後に調査員が回収した。

4. 調査項目

調査の内容は対象者の属性、健診の児の月齢と現在の栄養方法、分娩時週数、妊娠中の入院の有無、妊娠期の左右それぞれの乳頭形態、妊娠中の母乳育児希望の有無、母乳育児に関する母親学級受講の有無とした。妊娠末期に里帰り出産や他の医療機関へ紹介されるケースもあり、観察された医療機関が変わることが考えられることから、妊娠期かかりつけの医療機関と実際の出産した医療機関も調査項目とした。妊娠中での乳房・乳頭の観察に関する情報に関しては、乳房・乳頭の観察の有無、観察実施者、最初の観察週数、観察を自分から要望したか、妊娠全期間中の観察週数と合計回数、妊娠中の乳房・乳頭の観察の必要性の有無について「妊娠中の乳房・乳頭の観察は必要だと思うか」と、妊娠中の乳房・乳頭の観察の詳細な説明の有無については「妊娠中に乳房・乳頭の観察について看護職者から詳しい説明をうけたか」、乳房・乳頭のアドバイスや実際のケアについ

ては、「今回の妊娠中の看護職者からの乳房・乳頭のアドバイスについて満足しているか」、「今回の妊娠中の看護職者からの乳房・乳頭の実際のケアを受けて満足しているか」の有無とその理由についての自由記載とした。

5. 分析方法

得られたデータは全項目において Microsoft Excel2013にて集計し統計解析ソフトはSPSSver.24を用いた。乳房・乳頭観察の有無と各項目との関連を検討するために χ^2 独立性の検定もしくは正確確率検定を行い、有意水準は 5%未満とした。

6. 倫理的配慮

本研究は鹿児島大学医学部疫学・臨床研究等倫理委員会の承認（第 348 号）を受け承認後調査を実施した。対象者には調査票の回答・投函をもって研究への協力が得られたものとするが、投函後は個人の特定が不可能なため同意の撤回はできないこと、調査への協力が得られない場合であっても対象者に不利益が生じないことを書面にて説明した。調査票は無記名とし、回収箱にて調査票の回収をすることで個人が特定されないように配慮した。

Ⅲ. 結果

1. 対象者の背景（表 1）

対象は生後 3 か月児健診に来所予定の母親 302 名中で、回答が得られたのは 240 名で回収率は 79.5%であった。児の月齢が 5 か月以上の母親 30 名、36 週未満で出産の母親 8 名、欠損値の多い 3 名を分析対象から除外し、199 名の母親を分析対象とした。

平均年齢は 31.7 ± 4.7 歳で初産婦が 81 名 (40.7%) 経産婦が 118 名 (59.3%) であった。妊娠中の入院経験「有り」は 46 名 (23.1%) 入院経験「なし」が 153 名 (76.9%) であり、入院理由として最も多かったのは切迫流早産 34 名 (66.6%) 次いで妊娠高血圧症候群 5 名 (10.0%) であった。出産時週数は 38.6 ± 1.3 週数で児の月齢は 3.56 ± 0.6 か月であった。妊娠中の母乳育児希望は「希望あり」が 162 名 (81.4%)、「どちらでもよかった」が 36

表 1 対象者の背景

		N=199		
		n (%)	M±SD	Range
年齢 (歳)			31.7±4.7	
	初産婦	81 (40.7)	29.9±5.2	18-43
	経産婦	118 (59.3)	32.9±3.8	
出産週数 (週 日)			38.6±1.3	
出産回数			2.6±1.1	1-11
妊娠中の入院歴	なし	153 (76.9)		
	有り	46 (23.1)		
	(内訳: 複数回答あり)			
	切迫流産	5 (9.8)		
	切迫早産	29 (56.8)		
	妊娠高血圧症候群	5 (10.0)		
	悪阻	4 (7.8)		
	その他	8 (15.7)		
かかりつけの医療機関	個人病院	165 (81.7)		
	総合病院	26 (12.9)		
	助産院	8 (4.0)		
出産した医療機関	個人病院	156 (77.2)		
	総合病院	36 (17.8)		
	助産院	7 (3.5)		
児の月齢			3.6±0.6	2-4
妊娠中の母乳育児希望	母乳希望あり	162 (81.4)		
	母乳希望なし	1 (0.5)		
	どちらでもよかった	36 (18.1)		

名 (18.1%) であった。

2. 乳房・乳頭の観察の有無と概要 (表 2)

乳房・乳頭の観察については 129 名 (63.9%) と 6 割以上が受けていた。「観察あり」群のうち、「自ら乳房・乳頭の観察を要望したか」については、「要望した」17 名 (13.2%)、「要望しなかった」が 112 名 (86.8%) であった。観察回数については平均 1.22 回で 1 回が最も多く 45.9%、2 回が 35.7%、3 回が 13.2% であった。初回の観察の時期は、妊娠初期が 14 名で 1 割程度、中期が 39 名で 3 割、後期が 76 名でほぼ 6 割を占めた。観察者の内訳は「助産師」が 102 名 (79.1%) で 8 割近くが助産師であった。調査時の児の栄養については「母乳」が 59.9%「混合栄養」が 26.2%「人工乳」が 12.4% であった。

3. 妊娠出産に関する項目での乳房・乳頭の観察の有無との関連 (表 3)

妊娠出産に関する項目を乳頭観察の有無し群で関連について検討した。その結果、かかりつけの医療機関には「観察あり」群と「観察無し」群で有意な関連があった ($P=0.017$)。出産した医療機関においてもかかりつけ同様、「観察あり」群と「観察無し」群で有意に差があった ($P=0.011$)。妊娠中の母乳育児希望については「母乳育児希望」、「母乳育児希望無し・どちらでもよかった」を「観察あり」群と「観察無し」群で比較したところ、有意に差があった ($P=0.022$)。母親学級の受講の有無を「観察あり」群、「観察無し」群で比較したところ有意に差があった ($P=0.017$)。

表 2 乳頭・乳房の観察の有無と概要

		N=199	
		n (%)	M±SD
乳房・乳頭の観察の有無	無	70 (35.1)	
	有	129 (64.8)	
	(内訳) 自ら要望した	17 (13.2)	
	要望しなかった	112 (86.8)	
乳房・乳頭の観察回数	1 回	58 (44.9)	1.22±1.3
	2 回	46 (35.7)	
	3 回	17 (13.2)	
	4 回	4 (3.1)	
	6 回	3 (2.3)	
	8 回	1 (0.8)	
乳房・乳頭の観察時期 (初回)	～ 15 週 6 日	14 (10.9)	
	16 週～ 27 週 6 日	39 (30.2)	
	28 週～	76 (58.9)	
観察有の観察者内訳	助産師	102 (79.1)	
	看護師	13 (10.0)	
	不明	14 (10.9)	
調査時の児の栄養	母乳	121 (59.9)	
	混合	53 (26.2)	
	人工	25 (12.4)	
	無回答	25 (12.4)	

表 3 妊娠出産に関する項目と乳頭・乳房の観察の有無との関連

				N = 199
		観察あり n (%) n = 129	観察無し n (%) n = 70	P
かかりつけの医療機関	個人病院	114 (69.1)	51 (30.9)	0.017*
	総合病院	11 (42.3)	15 (57.7)	
	助産院	4 (50.0)	4 (50.0)	
出産した医療機関	個人病院	109 (69.9)	47 (30.1)	0.011*
	総合病院	16 (44.4)	20 (55.6)	
	助産院	4 (57.1)	3 (42.9)	
妊娠中の母乳希望	希望あり	111 (68.5)	51 (31.5)	0.022*
	希望なし・どちらでも	18 (48.6)	19 (51.4)	
母親学級の母乳の話	受講した	82 (71.9)	32 (28.1)	0.017*
	受講してない	47 (55.3)	38 (44.7)	

注：正確確率検定

4. 乳頭の形態, 児の栄養法, 満足度での乳房・乳頭の観察の有無との関連 (表 4)

妊娠初期の乳頭の形態, 児の栄養法, 妊娠中の

観察の必要性, アドバイスへの満足の有無, ケアへの満足の有無を乳房・乳頭の観察の有無し群で関連を分析した。「両乳頭ともに正常」群と「片

表 4 乳頭の形態, 児の栄養法, アドバイス・ケアへの満足度と乳房・乳頭観察の有無との関連

N=199

		観察あり n (%) n = 129	観察なし n (%) n = 70	P
乳頭形態	正常 (両側)	85 (63.4)	49 (33.6)	0.636
	扁平・陥没 (片側・両側)	44 (67.7)	21 (32.3)	
児の栄養法	母乳	85 (70.2)	36 (29.8)	0.050
	混合・人工乳	44 (56.4)	34 (43.6)	
観察の必要性	必要あり	129 (69.7)	56 (30.3)	—
	必要なし	0 (0.0)	14 (100)	
アドバイスへの満足	満足あり	114 (73.5)	41 (26.5)	0.000*
	満足なし	15 (34.1)	29 (65.9)	
ケアへの満足	満足あり	111 (74.0)	39 (26.0)	0.000*
	満足なし	18 (36.7)	31 (63.3)	

注：正確確率検定

側または両側乳頭が扁平もしくは陥没乳頭」群で比較したところ乳頭の形態で観察の有無に有意な差は見られなかった。3 か月健康診査の調査時の児の栄養法については「観察あり」群のほうが「観察無し」群より「母乳育児」が多かった (P=0.050)。乳房・乳頭観察が必要だと感じたものは 199 名中 185 名 (92.9%) であり、ほとんどの母親が観察の必要性を感じていた。「観察無し」群では、「必要なし」が 14 名であった。妊娠中の乳房・乳頭に関してアドバイスへの満足の有無に関しては「観察あり」群において満足している割合が多かった (P=0.000)。その理由としては「いろんなアドバイスがもらえた」、「詳しくアドバイスしてもらえた」などの意見があった。妊娠中の実際のケアへの満足の有無に関しては「観察あり」群「観察無し」群において有意に差があった (P=0.000)。(表 4) 理由としては「乳頭の状態を触って確認してもらえた」、「気になることや心配していることについて相談できた」などであった。乳房・乳頭

のアドバイス・ケアとともに「満足していない」と回答した母親は、「アドバイスやケアがない」ことが述べられ、一方で観察があっても満足していない母親からは「指導に一貫性がなかった」、「関わる人により指導が異なり困惑した」、「具体的に指導されていない」、「よくわからなかった」、「妊娠中にケアを受けていない」などの声があった。

妊娠中の母乳育児希望の「有り」を「有り」群、「無し」と「どちらでもよかった」群を「無し・どちらでもよかった」群とし母親学級で母乳の話聞いたか否かでの違いを確認した。その結果、妊娠中の母乳育児希望の「有り」、「無し・どちらでもよかった」群において母親学級で母乳の話聞いたか否かには違いがなかった。(表 5)

IV. 考察

本研究の対象者は、2016 年厚労省の第 1 子から第 2 子出産後の母親の平均年齢¹⁹⁻²⁰⁾の 30.7 歳と 32.6 歳に比較するとそれぞれ 29.9±5.2 歳と 32.9±

表 5 母親学級の母乳の話しの受講の有無と母乳育児希望の有無との関連

N=199

		母乳育児希望あり n (%) 162	希望無し・どちらでも n (%) 37	P
母乳学級の母乳の話	受講した	95 (58.6)	19 (51.4)	0.419
	受講していない	67 (41.4)	18 (48.6)	

注： χ^2 独立性の検定

3.8 歳であり、初産婦の年齢は約 1 歳が低く、経産婦はわが国の平均に近い年齢であった。

かかりつけの医療機関が個人病院の場合、観察ありとなる割合が高いという結果で、同様に出産場所の医療機関においても個人病院が観察ありとなる割合が高かった。この背景にいずれも総合病院が調査地域のハイリスクを受け入れる医療機関として機能しており、母乳育児の支援が手薄になっていることが推察され、結果として乳房・乳頭の観察する機会が総合病院より個人病院の方で観察が多く実施されていたと考えられた。

乳房・乳頭の観察について 2008 年の村井¹⁴⁾らの報告では実施率は 87.7% で、本研究では 63.9% と観察していた割合が低かった。村井らは対象が褥婦対象ではなく施設を対象とした結果ではあるが、本研究のこの結果は WHO⁶⁾ や UNICEF/WHO⁹⁾ の妊娠中の乳房・乳頭の手当ては必要ないという方針が乳房・乳頭の観察の機会を減少させている可能性も示唆された。

妊娠中の母親学級の受講の有無で妊娠中の母乳育児希望が有と希望無し・どちらでもよかったでは関連があるとは言えず、むしろ、妊娠中の母乳育児の希望と乳房・乳頭の観察が関連していた。母乳育児の希望があっても母親学級の受講につながらない理由は、母親にとって母乳育児希望だからという理由で母親学級を受講するほど母親学級の重要性を感じていないからではないかと考えられた。看護職者が乳房・乳頭を観察することはおのずと母親に個別にかかわることになり、そのかわりが母乳育児の意識づけとなり、さらに直接母親学級をすすめられることも加わり母親学級の受講につながるのではないだろうか。母親への最初の観察時期のほぼ 60% が妊娠後期であったが、この時期を妊娠初期から実施することで早くから自らの身体に意識が向き、母乳育児の希望の増加に繋がるのではないかと。先行研究でも妊娠中に希望していた栄養法が産後の母乳育児率に有意に関連していた¹⁵⁾ことから、結果として母乳育児の支援につながるものが期待される。

妊娠中の看護職者の乳房・乳頭の観察は、母親

の乳房・乳頭のアドバイスやケアに対する満足の有無と関連があり、母親は観察されることを望んでいると言える。観察があっても満足していない母親の意見から、観察が不要である理由を母親が理解できるよう伝えること、施設としてのケアの統一に課題があることも分かった。また、末永は母親が希望する母乳育児支援は「母親の疑問や不安を解決する支援」、「妊娠中から産後まで一貫した支援」を望んでいると述べている²¹⁾。これらのことから妊娠中からの乳房・乳頭を観察する機会を通して母親の母乳育児に関する理解度を確認しながら一貫したケアを妊娠中から支援していくことが必要である。今回約 4 人に 1 人の割合で妊娠中の入院歴があった。疾患の状態次第では安静治療などが必要なため、入院中や自宅での安静の指示を理由に情報提供を逸することのないように観察をすることで関わるのが重要ではないか。UNICEF/WHO⁹⁾ は妊娠中の乳房の観察は、出産前の準備として、女性が自分の赤ちゃんを母乳だけで育てることができるという自信を築くための支援の場とする必要性を述べている。看護職者は妊娠中から乳房・乳頭形態に関係なくすべての妊婦に観察の機会をもうけ、乳房・乳頭の観察をマイナスとして伝えるのではなく妊娠中の母親の 7 割が持っている母乳育児への不安²²⁾や悩みを軽減させ、井村が述べている自分の乳房に対する意識を高められる機会とすること²³⁾が望まれる。

V. 研究の限界

この研究が 3～4 か月児の健康診査に來所した母親を対象に行った調査であるため、母親による妊娠中の記憶による思い出しバイアスが存在することは否めない。また、母親が乳房・乳頭を観察されたことは結果ではあるが乳房・乳頭へ意識を向けられたかまでは不明である。今後は前向き調査を行い、データの質を高めていく必要がある。

VI. 結論

多くの妊婦が観察の機会を望んでおり、看護師、助産師による妊娠期の乳房、乳頭の観察は、乳房、

乳頭の観察をされていない母親に比較し、母乳栄養率が高かった。

Ⅶ. 謝辞

本研究に協力していただいた各施設のスタッフの皆様、調査の対象となった方々に心より感謝申し上げます。本研究論文に関連する利益相反事項はない。

文 献

- 1) 根津八紘. テキスト産褥乳房管理法 (SMC 方式). 長野: 諏訪メディカルサービス, 1984.
- 2) 日本母乳の会. 新・母乳育児なんでも Q & A. 東京: 一聡舎, 2003.
- 3) 堤 尚子. 堤式乳房マッサージ法. 東京: たにぐち書店, 2002.
- 4) 山内逸郎. はじめての母乳育児と心配事解決集第 4 刷. 東京: 一聡舎, 2009.
- 5) 林 時伸. 乳房・乳頭ケアの必要性. 小児内科, 2010; 42, 10: 1626-1628.
- 6) WHO / CHD. Evidence for the ten steps to successful breastfeeding. 1998.
- 7) Kathleen G. Auerbach, Jan Riordan. Breastfeeding and Human Lactation third edition. Jones and Bartlett Publishers. 1998.
- 8) Ruth A. Lawrence, Robert M. Lawrence, Breastfeeding: A Guide for the Medical Profession. 4th ed. St Louis County, Mosby, 1999.
- 9) UNICEF / WHO. BFHI2009 翻訳編集委員会編: 赤ちゃんとお母さんにやさしい母乳育児支援ガイド・ベーシックコース「母乳育児成功のための 10 か条」の実践. 医学書院. 東京, 2009
- 10) 平林 円, 笠松堅實監修. 米国小児科学会編. 母乳育児 - 妊娠前後の管理 医師のための母乳育児ハンドブック. 大阪: メディカ出版, 2007.
- 11) 飯田ゆみ子, 菅沼ひろ子. 日本の BFH 施設における妊娠中の乳房・乳頭ケアの実態調査. ペリナイタルケア, 2019; 38, 4: 391-398.
- 12) 山田恒世, 石井廣重. 乳房・乳頭ケアの必要性について. 日本母乳哺育学会雑誌, 2010; 4, 1: 9-16.
- 13) 村井文江, 江守陽子, 齊藤早香枝, 他. UNICEF / WHO の「母乳育児成功のための 10 か条」の支援からみた関東 6 県における母乳育児の状況. 一第 1 報: 母乳育児支援の現状 - 母性衛生, 2008; 48, 4: 496-504.
- 14) 村井文江, 齊藤早香枝, 野々山未希子, 他. UNICEF / WHO の「母乳育児成功のための 10 か条」の視点からみた関東 6 県における母乳育児の状況. 一第 2 報: 母乳育児支援と母乳育児率の関連 - 母性衛生, 2008; 48, 4: 505-513.
- 15) 芳賀亜希子, 徳武千足, 近藤里栄, 他. 産後 1 ヶ月児の母乳育児の確立と基礎的・産科学的要因および母乳育児ケアとの関連性. 母性衛生, 2013; 54, 1: 101-109.
- 16) 井上理絵, 富岡美佳, 梅崎みどり, 他. 妊婦が希望する妊娠中の母乳育児支援 - 初産婦と経産婦の比較 - 山陽論叢, 2015; 22, 1-9.
- 17) 橋本武夫監訳. UNICEF / WHO 母乳育児支援ガイド. 東京: 医学書院, 2003.
- 18) 平成 27 年度 乳幼児栄養調査結果の概要 <https://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-11900000-Koyoukintoujidoukateikyoku/0000134460.pdf> (2020 年 12 月 17 日)
- 19) 厚生省 平均初婚年齢と出生順位別出生児の母の平均年齢の年次推移 http://www8.cao.go.jp/shoushi/shoushika/meeting/kokufuku/k_7/pdf/ref1.pdf (2020 年 12 月 17 日)
- 20) わが国の母子保健. 令和 2 年. 東京: 公益社団法人母子衛生研究会, 2020.
- 21) 末永芳子, 羽田野花美, 中島由紀子. A 県における母乳育児の現状と課題 - 母親が満足する母乳育児支援を探る - 保健科学研究誌, 2016; 13, 147-158.
- 22) 野口記子, 成田政江, 常井暁子, 小林俊江. 妊娠中の母乳育児支援の効果 - 妊婦の母乳育児への意識調査から - 茨城県母性衛生学会誌, 2004; 2467-2469.
- 23) 井村真澄. 乳房管理のポイント - 母乳育児への自信とプレスト・アウェアネスを高める - 周産期医学, 2012; 42, 1: 39-43.
(受稿 2020.12.25; 受理 2021.4.27)